

一関城遺跡発掘調査報告書

釣山地区配水管布設替工事に伴う発掘調査

令和3年3月

一関市

一関市教育委員会

序

一関市は、四季折々に多彩な表情を表す豊かな自然に恵まれています。栗駒山から磐井川が東流し、市内中心部を経て北上川に注いでいます。縄文時代から人々の生活が確認でき、現在に至るまで多様な埋蔵文化財包蔵地が多く存在しています。

その埋蔵文化財包蔵地の一つに、一関城遺跡があります。戦国時代には葛西氏の勢力下であり、江戸時代初期に廃城となりました。城としての役目を終えた後、一関藩の田村氏はそのふもとに屋敷を構えており、藩政の中心はそこに移りました。現在は城跡を釣山公園として整備し、市民の憩いの場を提供しています。

このたび、上水道の整備の一環として釣山地区配水管布設替工事を実施するにあたり、市教育委員会による緊急発掘調査を実施しました。この調査成果を広く公開し、市民並びに全国の方々にも当市の文化財を知って頂き、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

結びに、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

令和3年3月

一関市

市長 勝部 修

一関市教育委員会

教育長 小 菅 正 晴

例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和2年度に実施した一関城遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、一関市水道課が実施する釣山地区配水管布設替工事に伴い、掘削を受ける範囲の記録保存のための発掘調査を実施したものである。
- 3 調査対象地は、一関城遺跡（一関市釣山1-9）である。
- 4 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 5 調査体制は以下のとおり。

| | | | | |
|-------|------|----------|----|----|
| 教育委員会 | 文化財課 | 課長 | 千葉 | 浩 |
| | | 文化財係長 | 金野 | 修 |
| | | 主任学芸員 | 菅原 | 孝明 |
| | | 文化財調査研究員 | 光井 | 文行 |
| | | 文化財調査研究員 | 小澤 | 絵美 |
- 6 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は光井が行った。
- 7 本書図5に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。
(許可番号 令和3年2月15日総第11016号)
- 8 土層断面図の土色表示は新版標準土色帖2002年度版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 9 調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は川嶋印刷株式会社、調査補助業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、それぞれ委託した。
- 10 調査協力者・機関（敬称略・50音順）
阿部勝則、及川幸子、小岩寿男、佐々木光昭、佐藤健爾、佐藤光雄、二階堂孝子、羽柴直人、室野秀文
岩手県教育委員会、奥州市教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
骨寺村ガイダンス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 序 | 1 |
| 例言 | 3 |
| 目次 | 4 |
| I 釣山地区配水管布設替工事に伴う発掘調査 | |
| 1 遺跡の位置と地理・歴史的環境 | 5 |
| 2 調査に至る経緯 | 11 |
| 3 調査結果 | 13 |
| 4 まとめ | 25 |
| 遺物観察表 | 26 |
| 写真図版 | 27 |

I 釣山地区配水管布設替工事に伴う発掘調査

1 遺跡の位置と地理・歴史的環境

(1) 位置と環境

一関城遺跡のある一関市は、岩手県南端に位置する。平成17年に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村が合併、さらに23年に藤沢町と合併した。東西約63km、南北約46kmで、東西に長い広がりを見せている。中央部を北上川が南流し、それに磐井川、砂鉄川、千厩川、金流川等が合流している市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。また、中央部を南北に、西から東北自動車道、国道4号線、JR東北本線、東北新幹線が走る。

一関城遺跡は、JR一ノ関駅から西に約800mに位置し、北西には磐井川が北東方向へ流れている。

(2) 地理的環境

一関市内の最高地点は西方にそびえる栗駒山の山頂で、標高1627.7mである。西は奥羽山脈の東麓から東は北上山地西縁にわたって分布しているのが磐井丘陵である。一関市（一関地域）の全域と平泉町、一関市花泉町の範囲である。磐井丘陵は西縁部が標高500～400mから東方へしだいに低下し、東縁の真滝・弥栄地区で標高100m前後となる西高東低の分布になっている。胆沢～油島線の褶曲変換部は、一関市西部を中心とした新第三系の中に認められる褶曲構造で、傾斜角の大きい部分を連ねた褶曲軸をたどると、一関市花泉町油島付近から一関市真柴、釣山、蘭梅山、平泉町毛越寺・中尊寺付近を経て奥州市胆沢小山駒籠に至る。傾斜角は釣山付近で最大で70°、真柴で46°、油島で30°となる。

一関市内の西部は磐井川の流域であり、市街地東部の真滝、弥栄、舞川地区も滝沢川など北上川の支流域になっている。市内西部を流れる小河川沿いにも小規模な平野が断続的に発達し、場所によっては、丘陵内の小盆地の盆地底になっている。これらの大部分は沖積平野でなく、いわゆる洪積段丘の段丘面となっているものである。比較的広がりのある磐井川下流の赤荻や萩荘の平野などは洪積世後期の河床面が段化したもので、磐井川にのぞむ急な河崖が段丘崖である。

赤荻盆地の河岸段丘は、開析されて段丘の原形をとどめていない丘陵頂面を除けば、上位から、泥田段丘・鶴巻段丘・古内段丘の3段丘に区分することができる。泥田段丘が45～25m、鶴巻段丘が約10m、古内段丘が約5mである。鶴巻段丘は更新世後期のウルム氷期という時代の産物で、約2万～3万5千年前だということがわかっている。

巖美盆地にも、上位から鴻巣段丘・五串段丘・舟卸段丘が形成されている。巖美溪は、磐井川が五串段丘を下刻して形成した溪谷である。巖美溪の惜の滝付近より上流では、磐井川の河床は五串段丘面よりそれほど下位でなく、磐井川は浅い谷底を流れている。

赤荻盆地の鶴巻段丘面は蘭梅山と釣山を結ぶ線を越えて東方に広がり、三関付近で丘陵に達している。すなわち一関市の中心市街地の大部分は、鶴巻段丘の一部である。北上川と磐井川の合流点を含めて、北上川の沿岸に広がる河岸平野は、磐井川沿いにあるのは、磐井橋の下流側付近で分布が流路沿いに狭まれて上流に及んでいる。一関市の中心市街地付近における鶴巻段丘と河岸平野との境界は、両者の高度差がわずかで、あまり目立たないが、ほぼ桜木町と桜町を結ぶ線である。黒沢橋のやや上流側の磐井川左岸から銅谷町にかけて、鶴巻段丘を面を下刻して北東方向に流れた磐井川の本流または分流の旧河道の痕跡がある。旧川道にのぞむ段丘崖には、段丘構成層の砂礫層が露出している。山目小学校の校地を含む鶴巻段丘の残片が残されており、周囲は段丘崖になっている。

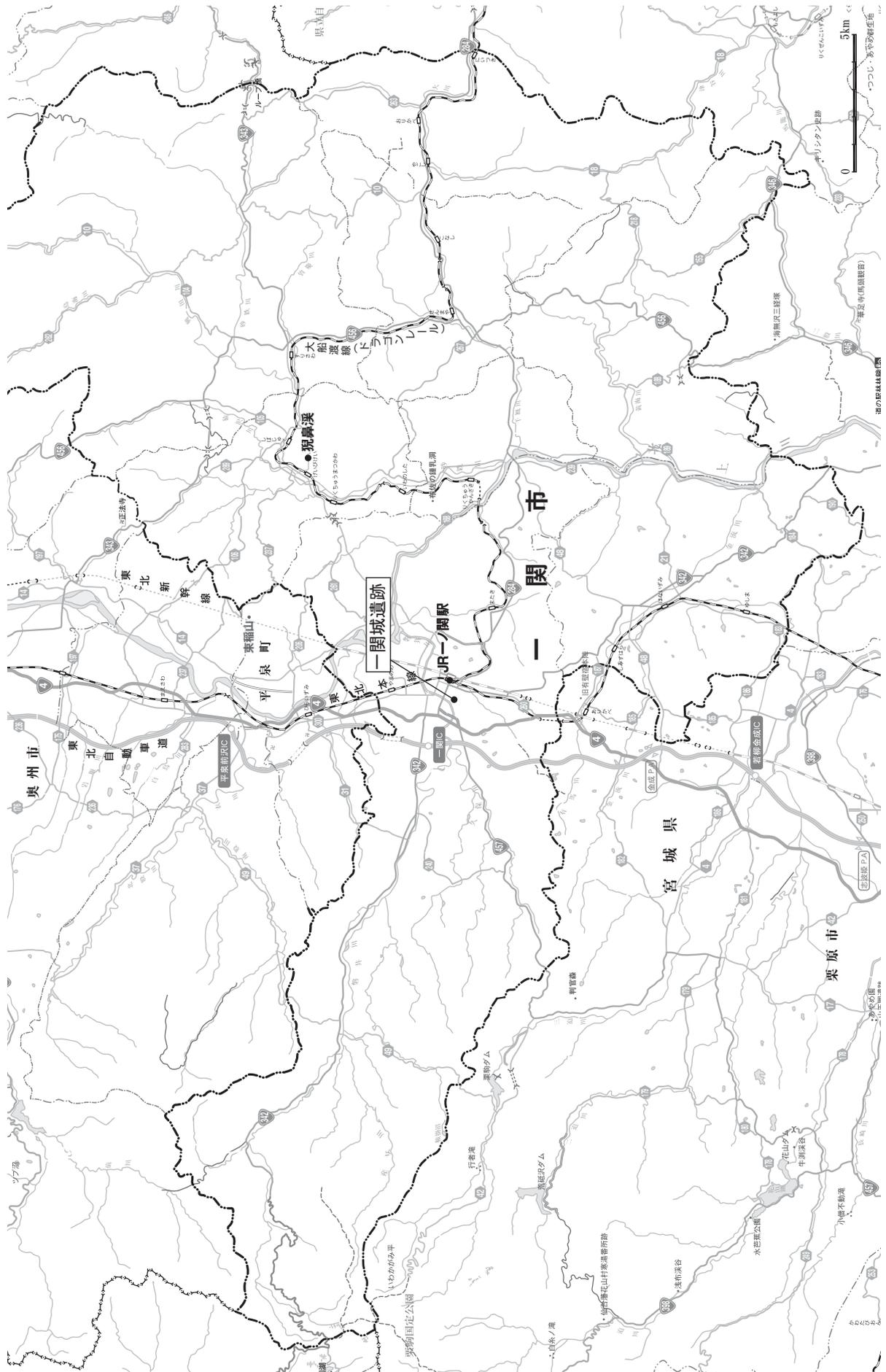


図1 一関城遺跡跡位置図

(3) 歴史的環境

一関市西部で確認されている遺跡は、磐井川などの河川に沿った平野部、段丘面、丘陵上に分布している。古代史上の事蹟は断片的であり多く伝えられておらず、8世紀末～9世紀の東北平定の頃からである。宗教による蝦夷の同化政策によって、寺社の建立が行われ、配志和神社と舞草神社の延喜式内社が置かれた。また山目には泥田廃寺跡〈図2 遺跡分布図6・7〉が発掘調査によって確認されている。

歴史的記述はあまり残されていないが、11世紀に起こった前九年合戦、後三年合戦で戦場となった場所などが、文献中の地名で想定され歴史上に現われてくる。例えば、前九年合戦で源頼義と対戦した安倍頼良の最南の城柵「小松の柵」が、一関市萩荘の磐井川沿いにあったとされている。

前九年合戦、後三年合戦を経て東北の覇者となった藤原清衡は、平泉に浄土思想をもととした都市を建設した。その中心人物の一人、中尊寺経蔵別当の自在房蓮光が経蔵に寄進した荘園が、骨寺村荘園遺跡としてある。しかし、その藤原氏も文治5年(1189)の奥州合戦に敗れ、源氏の総帥源頼朝によって滅ぼされる。

その後、磐井郡は、鎌倉幕府の御家人で奥州総奉行の系譜を引く、下総国(千葉県)葛西庄出身の葛西清重に管理されることとなる。これより代々、胆沢・江刺・磐井・気仙・牡鹿の5郡を中心に周辺勢力との軋轢や内紛を繰り返しながら勢力を拡大し、現在の岩手県南・宮城県北の北上川流域一帯を支配した。天正18年(1590)の豊臣秀吉の奥羽仕置までの間、葛西氏の支配が続いた。

一関地方では、古くから萩荘黒沢村を中心として黒沢氏が領地経営に参画している。また、奥州合戦での軍功が認められ山目、中里村、増沢郷を与えられた小野寺氏も当地での存在が確認できる。

室町期になると、関東管領の統治に入り、足利一族が着任し、その中心となったのが大崎氏であった。葛西領の南は大崎領と接しており、14世紀後半から両者間での軋轢が始まり、領土問題で紛争が拡大し戦国末期まで続いていく。天文3年(1534)大崎領内に内乱が起こり、その影響で葛西氏北辺の柏山氏は南部氏の南侵を受けたが撃退する。その軍功により、柏山に寄食していた小岩一族は、南側から侵攻してくる大崎氏の対策として、市野々村を中心とする萩荘西半に移封されたのである。その頃まで、一関地方の中心的な立場であった黒沢氏は、徐々に小岩氏の台頭によって取って代わられることになっていく。

葛西氏と大崎氏との抗争が続く中、下剋上の時勢に入り、葛西氏は領内経営で精一杯状態になっていた。内紛の続発から、大崎氏同様に小田原城に参陣できず、奥州仕置によって領地を剥奪された。

天正19年(1591)、その領地は伊達氏の支配下となり、その家臣茂庭綱元は柴田郡沼辺から磐井郡赤萩に所替えとなり12ケ年の在住であった。また、慶長9年(1604)、一関地方は伊達氏の一門格留守氏が分封配置された。その後、伊達政宗の十男の伊達宗勝に替わった。以後、伊達氏の庶流にあたる田村宗良の子田村建顕が岩沼より一関に入部し3万石の藩主となった。田村氏は幕府の直参として、武士支配の封が解けるまで十一代にわたり継承された。

一関地方で確認されている城館跡は、丘陵の先端部や独立した段丘上に構築されている。一関城周辺の城館跡をみると、丘陵上にあるものは一関城(図2 遺跡分布図の1)、中里城(2)、臥牛館(4)、若宮館(5)、三ノ関城(19)、下黒沢館(25)、市野館(26)、的場館(27)、要害城(28)、段丘上にあるものは前堀城(3)、小石名沢古館(11)で、前者が多い。城館の配置は、領地経営上、軍略の配慮から構築されたものであるが、時代の趨勢とともに変化したものである。萩荘の小岩氏が勢力を拡大していくことが、小岩一族の支城の分布でみられ、磐井郡の西部で小岩氏が強力な存在になっていったことが伺われる。

(光井)

(4) 一関城について

東日本旅客鉄道株式会社東北本線・大船渡線の一ノ関駅の西約800m、概ね北東から南西方向に延びる丘陵の北端、釣山頂部から山麓の標高30～90m（比高60m）に位置する山城で、高崎城、釣山城とも呼ばれる。東側には、奥州街道（旧国道4号）が南西から北東に走り、遺跡のすぐ北側は、近世田村氏の居館跡、磐井川の渡河点（現上の橋付近）でもある。また、西側は、西から北東へ流れる磐井川によって作り出された崖となっている。

一関城が記録に残るのは戦国時代以降で、天文5年（1536）、葛西氏が領内の再編成を企て、本拠地を石巻日和山から登米寺池としたとき、すでに登米にいた小野寺氏を一関に移したとされている。天正年間の城主は小野寺伊賀道照であったが、天正19年（1591）糠塚の役で討ち死にしている。葛西氏が滅亡し、旧領は一時木村氏に移ったが、奥州仕置の後、一関は伊達領となった。慶長9年（1604）一門格の留守政景を一関に所替えとした。このとき幕府が一関城館山の使用を固く禁じたため、城の北東麓に居館を構えたとされる。さらに寛文年中の伊達兵部宗勝と続いたが、寛文事件の咎により土佐に配流となった。その後、天和2年（1682）田村建頭が岩沼から移封となり、以後明治維新まで田村氏が11代にわたって一関藩（仙台藩支藩）藩主を継承した。

城本体は、東西約250m、南北約300mの長楕円形をなす。南西部の尾根が2ヵ所で堀り切られ、その北東側に本丸がある。本丸は千疊敷と呼ばれ、標高90m前後、東西約90m×南北約50mのほぼ長方形を呈する。北東隅は一段低くつくられており、正面の虎口であったと考えられ、下方の広場と連結している。また、西側にある田村神社の社殿の後方には小山があり、物見櫓などの施設が存在していた可能性がある。この南側には堀切に沿って土塁が残存している。本丸西側の堀切は大規模で、北西方向の堅堀へとつながり、城の西側を区画する。本丸から北西、北東、南東の3方向に延びる尾根とその間の斜面部は、適度な落差がつけられ、雛壇状に造成された郭が配置されている。

なお、近世の地誌である『仙台領古城書上』（延宝年間〈1673～1681〉）磐井郡 一ノ關邑 の項には、

「平 一 一ノ關城 東西四十間 南北二十八間

二ノ丸 東西三十間 南北二十間

城主伊達上野介政景。慶長年中ヨリ十二三年餘居住。」

『風土記御用書出』（安永4年〈1775〉）一關村 の項には、

「一 古館 一ツ

一 高崎館 當時一關様御居館ニ付間敷御書上不仕候事

往古ハ小野寺伊賀守と申御方御住居被成其以後伊達上野様伊達兵部少輔様御住居被成置候處右年月相知不申候當時一關様御居館ニ御座候事」とある。

(山川)



図2 周辺の遺跡分布図

| No | 遺跡名 | 種別 | 時代 | 遺構・遺物 |
|----|--------------|--------|-------|---------------------|
| 1 | 一関城（高崎城・釣山城） | 城館跡 | 中世末 | 空堀、柱穴、美濃焼陶器片、古銭 |
| 2 | 中里城（安倍沢館・古館） | 城館跡 | 中世末 | 空堀、土塁 |
| 3 | 前堀城 | 城館跡 | 中世末 | 平成11年度調査 |
| 4 | 臥牛館（伏牛館） | 城館跡 | 中世末 | 平場 |
| 5 | 若宮館（中条館） | 城館跡 | 中世 | 空堀 |
| 6 | 泥田廃寺跡A | 寺院跡 | 平安 | 土師器、須恵器、礎石 |
| 7 | 泥田廃寺跡B | 寺院跡 | 縄文、平安 | 土師器、須恵器、礎石、瓦、石器 |
| 8 | 宮田館 | 城館跡 | 中世末 | 空堀 |
| 9 | 赤菽焼 | 生産遺跡 | 近世 | 陶器 |
| 10 | 月町 | 散布地 | 平安 | 土師器 |
| 11 | 小石名沢古館 | 城館跡擬定地 | 中世末 | 平成25・26年度調査 |
| 12 | 十二神 | 散布地 | 縄文 | 縄文土器（晩期） |
| 13 | 釜淵 | 散布地 | 縄文 | 石器、縄文土器 |
| 14 | 工業高校隣接 | 散布地 | 平安 | 土師器 |
| 15 | 西光寺裏 | 散布地 | 縄文 | 縄文土器（中期） |
| 16 | 野中 | 散布地 | 弥生 | 弥生土器 |
| 17 | 口袋 | 散布地 | 弥生 | 弥生土器 |
| 18 | 下モ下釜 | 集落跡 | 平安 | 土師器、住居跡 |
| 19 | 三ノ関城（白山城） | 城館跡 | 中世末 | 囲郭、空堀、土塁 |
| 20 | 機織山Ⅲ | 散布地 | 平安 | 土師器、須恵器 |
| 21 | 機織山Ⅰ | 墳墓 | 近世 | ピット、溝、須恵器、陶器、墓碑、五輪塔 |
| 22 | 機織山Ⅱ | 散布地 | 平安 | 竪穴住居、カマド、周溝、土師器、須恵器 |
| 23 | 中田 | 散布地 | 平安 | 土師器、須恵器 |
| 24 | 宮沢 | 散布地 | 縄文 | 石鏃、石槍 |
| 25 | 下黒沢館（南館・片平館） | 城館跡 | 中世末 | 空堀、土塁 |
| 26 | 市野館（秋葉館） | 城館跡 | 中世末 | 囲郭、空堀 |
| 27 | 的場館（西館城） | 城館跡 | 中世末 | 囲郭、空堀 |
| 28 | 要害城（下要害城） | 城館跡 | 中世末 | 連郭、空堀、土塁 |
| 29 | 中屋敷 | 散布地 | 縄文 | 石鏃 |
| 30 | 西沢 | 集落跡 | 平安 | 住居跡、土師器、須恵器 |

表1 周辺遺跡一覧表

2 調査に至る経緯

一関市教育委員会では、一関城遺跡の発掘調査を昭和59年度から61年度（1984～1986）にかけて実施している。一関市都市計画課の事業（日本庭園造成）による整備に伴う発掘調査である。

昭和59年度は、トイレ整備のための試掘調査と、庭園の池に係る範囲について記録保存を目的とした発掘調査を実施し、遺構は概ね戦国時代と推定される柱穴と性格不明の小穴群、遺物は銅銭3点を確認した。戦国時代からの城館跡であるとする古記録を裏付ける結果であった。

昭和60年度は、庭園入口にあたる部分の発掘調査を実施（調査期間：昭和60年11月8日～15日）し、遺構はいずれも北側に崖縁となる位置で確認し、直径25cm前後の小穴2基、直径約1mの平面形をもつ土坑である。遺物は小穴のうち1基から陶器片1点、土坑から陶器片1点を確認した。

昭和61年度は、都市計画課の事業が国土庁の「花と緑の年モデル地区整備事業」に指定され、一関城遺跡を「藩政の森」と位置付け公園整備を行うこととなり、これに伴う発掘調査を実施（調査期間：昭和61年8月1日～10月4日）した。都市整備課と協議し、標高60m以上で整備計画を実施することから、その範囲の8ヶ所（合計1,075㎡）を調査対象とした。これら東斜面の平場の地形に合わせてほぼ傾斜方向にトレンチを設定し、第2、4、5、8地区の4箇所には防御施設として構築されたと考えられる柱列を確認した。いずれも地表面から1m以上深い位置にあり、城の必要性を失った後の埋めた状況であると考えられる。出土遺物は、ほとんど埋土中からであるが陶器片と渡来銭を確認し、過去2回の調査同様戦国時代のもので推定される。今回の調査で、頂上の一番広い平場を中心として階段状に帯郭を持つ比較的小規模な城の防御施設の構築状況を確認できた。部分的な調査ではあったが、遺構面が比較的深い位置に存在することが判明し、事業実施による遺跡への影響は少ないと考えられた。また工事に際しては、歴史的な釣山の性格から千畳敷や高い先端部分等は眺望を維持することが望ましいと都市計画課へ伝えた。

こうした経緯を経て、一関城遺跡は現在釣山公園として整備され市民の憩いの場となっている。

さて、令和元年（2019）6月18日、一関市水道課（当時は給水課であるが、以下水道課で統一する）から釣山地区配水管布設替工事を目的とした試掘調査依頼書が提出された。釣山配水池から伸びる配水管の布設替工事のため、配水管が埋設されている遊歩道を掘削する計画である。これを受けて、同年7月11日～12日にかけて試掘調査を実施した。具体的には、工事面積約370㎡（285m×1.3m）の中でトレンチを13か所設定して試掘調査した。その結果、東端の1、2トレンチから溝及び配石遺構、西端付近の12トレンチから柱穴掘方と考えられる遺構を確認した。この結果を受けて水道課と協議し、遺構を確認した1～3トレンチ及び11～13トレンチの範囲を発掘調査、それ以外の部分は工事立会を行うことで合意した。そこで、同年7月26日付けで文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財の発掘の通知を受理し、同年7月29日付け教文第04019号文書により工事に先立ち事前の発掘調査を実施するよう水道課に勧告した。

発掘調査は一関市教育委員会が実施することとしたが、その時期については、上折壁城の緊急発掘調査を実施中であったことから年度内の対応ができず、令和元年11月13日付け事務連絡により延期することを水道課へ伝えた。その後、準備が整った令和2年（2020）5月から発掘調査を開始した。工事立会については、令和元年度内に実施し、遺構・遺物がないことを確認している。

（菅原）



1:2500

※遺跡の範囲にトーンをかけた。また、合成した縄張図は、室野秀文 2017「一関城」『東北の名城を歩く 北東北編 青森・岩手・秋田』吉川弘文館 所収の図をもとに加筆した。

図3 一関城遺跡の範囲

3 調査結果

調査地点は、一関城遺跡の東斜面中腹（南調査区）と北東斜面下位（北調査区）の2ヶ所で、一関市宇釣山地区内に所在する。南調査区は標高68m、北調査区は標高34~40m、両地区とも現況は遊歩道になっている。調査は重機により、表土、盛土を除去した後、手作業で遺構検出、精査を行った。

平面図の作成にあたっては、下記の基準杭の座標を元にして実測をおこなった。写真撮影は一眼レフデジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基 No.1 (T-1) $X=-119137.742$ 、 $Y=+25690.645$ 、 $H=34.988$

基 No.2 (T-2) $X=-119158.190$ 、 $Y=+25686.849$ 、 $H=40.061$

基 No.3 $X=-119322.233$ 、 $Y=+25700.415$ 、 $H=68.856$

基 No.4 $X=-119349.970$ 、 $Y=+25703.560$ 、 $H=68.648$

(1) 基本土層

(南調査区)

I層：10YR4/1褐灰色碎石。上部のみしまつて硬いがそれ以外はしまっていない。粘性なし。

遊歩道を作るために敷かれたもの。

II層：10YR5/6黄褐色砂質。ややしまっている。粘性ややあり。垂角礫(径10~30cm)を多く含む。造成した土と考えられる。

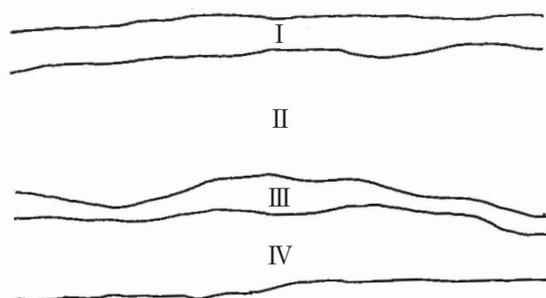
III層：10YR5/4にぶい黄橙色砂質シルト。ややしまっている。粘性あり。炭化物粒、小石(径1cm大)を少量含む。

IV層：10YR6/4にぶい黄橙色シルト。しまっている。粘性あり。

(北調査区)

南調査区

— L=68.900m



北調査区

— L=35.200m

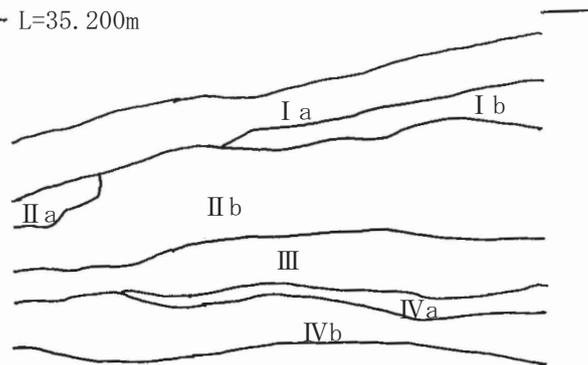


図4 基本土層

- I a層：10YR4/1褐灰色。碎石。しまっている。粘性なし。人為的に敷かれたもの。
I b層：10YR2/3黒褐色砂質シルト。しまっている。粘性ややあり。炭化物を少量含む。表土。
II a層：10YR2/1黒色シルト。しまっている。粘性ややあり。
II b層：10YR2/1黒色シルト。しまっている。やや粘性あり。灰白色泥岩粒を幾分含む。
III層：10YR1.7/1黒色シルト。しまっている。粘性ややあり。
IV a層：10YR6/4にぶい黄橙色シルト。しまっている。粘性あり。
IV b層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト。しまっている。粘性あり。地山。

(2) 確認された遺構と遺物

確認された遺構は、南調査区で竪穴遺構1棟、土坑1基。柱穴2個、北調査区で溝5条である。

南調査区

SX-1

遺構（図7、写真図版2）

調査区北端で、II層を除去した後、炭混じりにぶい黄褐色砂質シルトの広がりが見出され遺構とわかったものである。北側が一部攪乱を受けている。遺構の形状、規模は幅約1mトレンチの調査のため詳細は不明である。確認された南壁は長さ約1.4mで、直線状で、北西—南東方向に伸びている。北側の壁は不明である。規模は検出されている底面の長さが約2.6mである。北端にわずかに残存する南西—西方向に伸びる壁が見出されており、この壁が本遺構に伴うものと仮定すると、形状は方形で、一辺が5m以上の規模をもつ遺構と推定できる。残存する南側の壁高は約21cmである。

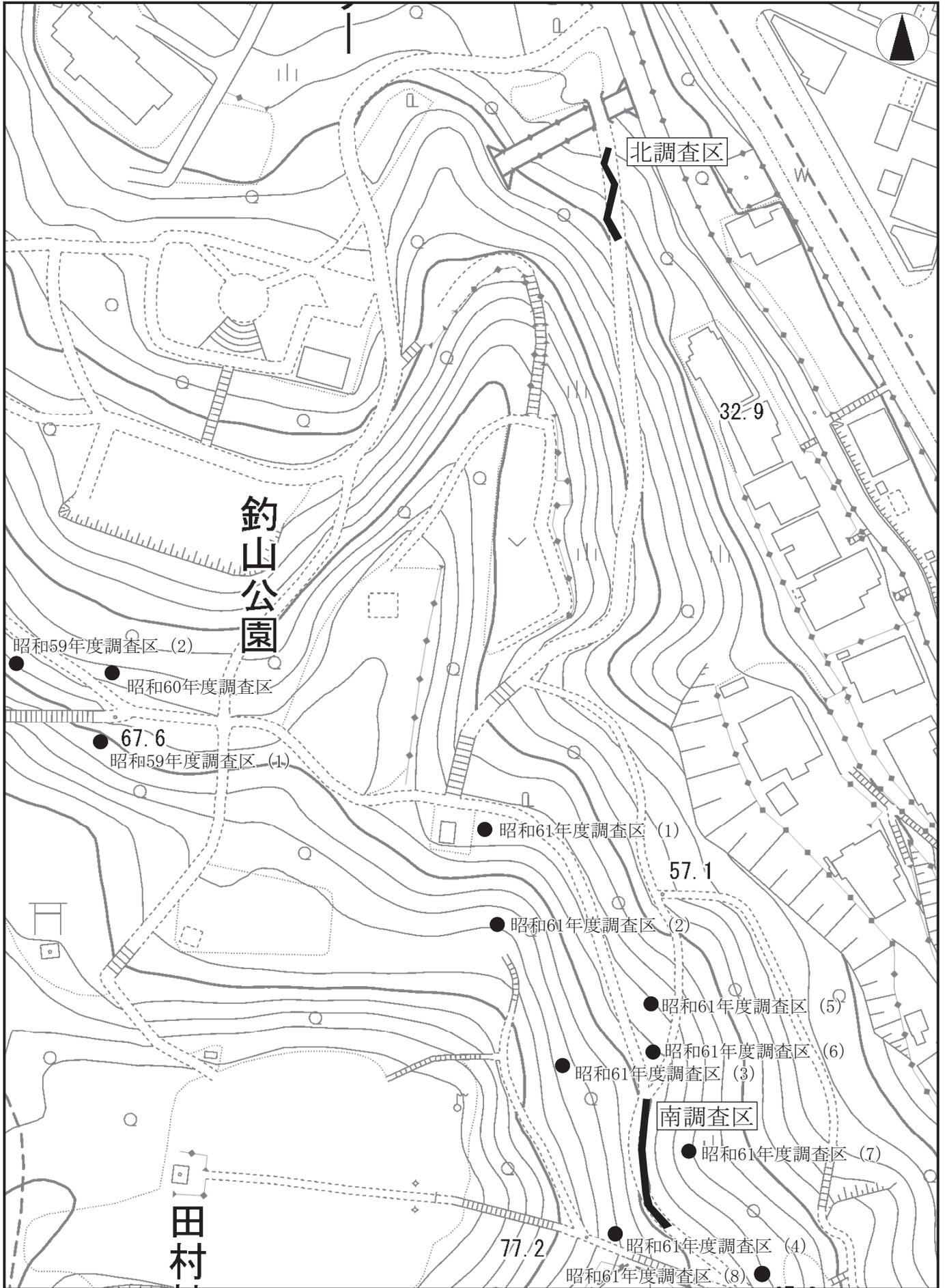
埋土の上には、厚さ約60～80cmの黄褐色砂質土層と厚さ約10～20cmの碎石層がある。埋土は上半部が南側で炭化材、炭化物粒をやや多く含み、全体に亜角礫（径5cm大）含むにぶい黄褐色砂質シルト層、下半部が炭化物粒、灰白色の岩粒を少量含むにぶい黄褐色土層で占められている。

底面はにぶい黄褐色シルト層を掘りこんでつくられており、ほぼ平坦であるが、幾分凹凸があり、小礫が出ている。北側半分には炭化材や炭化物粒が底面近くで検出されているが、その周りに現地性焼土が形成されていないことから、投げ込まれたか、流されてきたものと考えられる。貼り床等の施設は施されていない。

南側の壁に沿って幅約40～48cm、深さ約14～30cm規模の溝が見出されている。埋土は炭化物粒、小石を含む褐灰色砂質シルト層で、断面形は、U字形を呈している。北側の東寄りに、長径約1m、深さ約12cmの皿状の土坑が見出されている。埋土は炭化物粒を少量含む灰黄褐色の単層で占められている。底面は平坦で断面形が浅皿状を呈している。本遺構に伴うものと考えられる。

遺物（図11、写真図版5、表2）

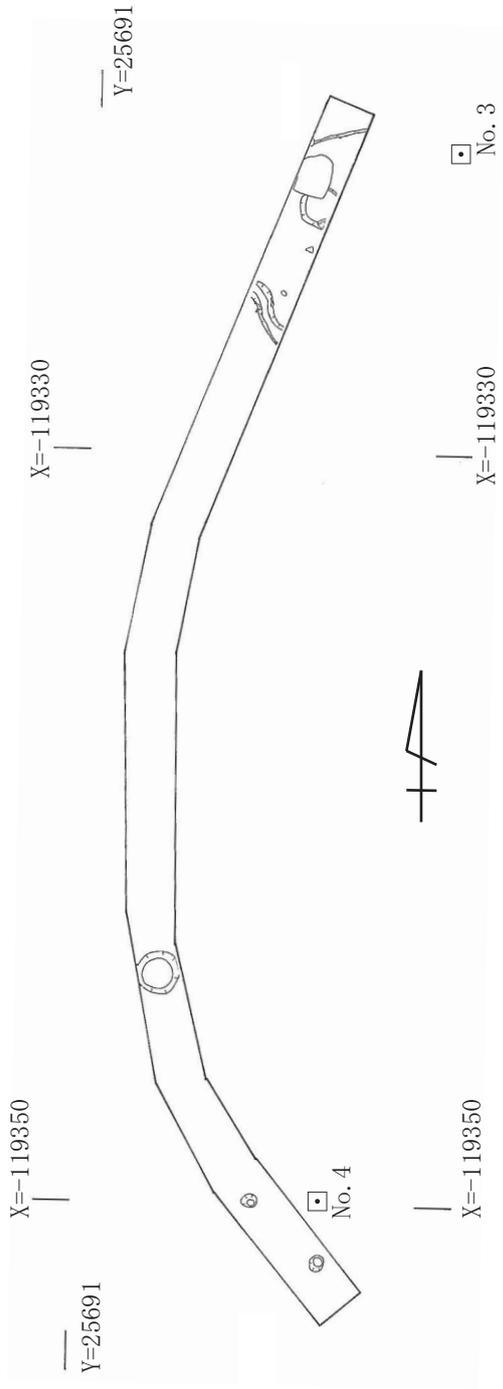
陶磁器・土器類が5点、銭貨が1点出土している。1は甕形陶器の口縁部片である。底面直上から出土している。口縁部はN字形状に折り返されて、内に空洞を保つように作られており、口唇部が上方につまみ出されている。口辺部の厚さは最大2cmである。この特徴から、15世紀前半の常滑産の陶器片であると考えられる。2は瑞反碗白磁の口縁片で、埋土最下部から出土している。中国（明）産で、16世紀のものである。3は底部から口辺部まで3分の1ほど残存する浅鉢で、底面直上から出土している。体部は底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部が短く直上している。ロクロ不使用で内外面をヘラナデで調整され、特に内面は一部ヘラミガキ状の調整である。内面に煤や2次焼成痕は見られない。色調は外面が灰褐色、内面が褐灰色で、形態、胎土、焼成から、かわらけ、土師質土器、瓦器とも違い、中世土器とした。共伴遺物から16世紀頃に位置づけられると考える。4は高台付皿の



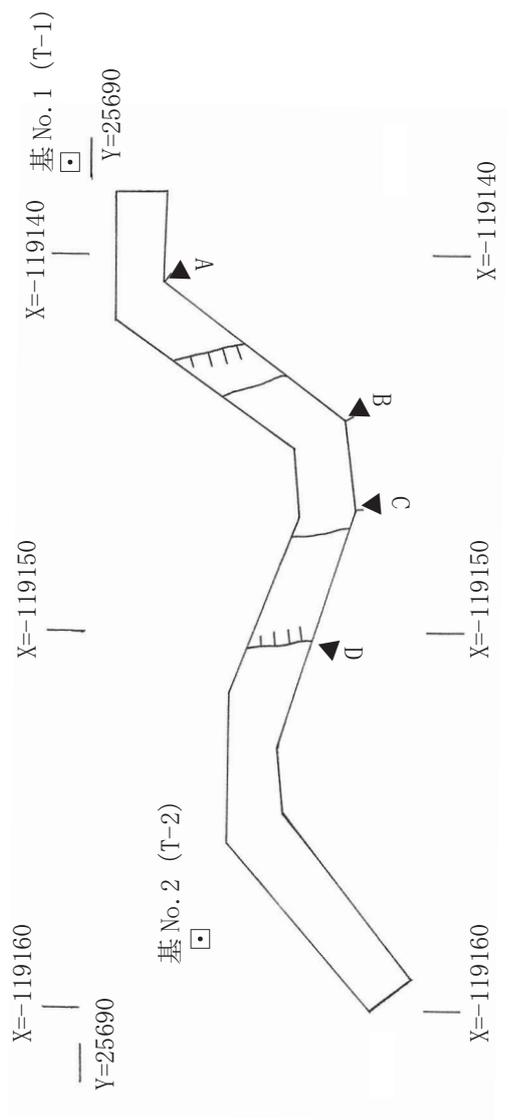
※敷地の境界，その他掲載されている情報の内容を証明するものではありません。

縮尺 1/1000

図5 調査区位置図



南調査区



北調査区



图6 調査区平面図

白磁片で、底部から口辺部まで最大6分の1程残存している。胴部が内湾し口縁部が外反している。器壁は薄く、厚さは3mm未満である。中国（明）産で16世紀に位置づけられる。5は甕の胴部片で内外面を横方向のヘラナデで調整されている。1と同じもので、常滑産で15世紀前半のものでと推定される。26は埋土下部から出土した銭貨「永楽通寶」である。大きさ、文字、材質から、中国本銭である。16世紀に位置づけられる。

本遺構の性格は、幅約1mのトレンチで検出した一部の遺構から無理して推定すれば、壁際に溝状の遺構が伴うことや、柱穴が確認できなかったことから、竪穴状の倉庫、工房などの遺構であった可能性がある。時期は16世紀代に属するものと考えられる。

SK-1

遺構（図8、写真図版3）

本遺構は南調査区の中央部に位置し、表土を除去して、遺構検出の作業時に円形状のにぶい黄褐色状の広がり確認され、遺構とわかったものである。遺構の東西は調査区域外に伸びている。重複関係はない。平面形はほぼ円形を呈し、南北径114cm、東西径98cm（検出された部分）、深さ84cmの規模をもつ。断面形はほぼコップ形を呈し、底部から胴部へは幾分反して立ち上がっている。底面はやや大きな凹凸がある。

埋土は上半部が炭化物粒を少量、明褐色～明黄褐色粘土質シルトの小ブロックをやや多く含むにぶい黄褐色粘土質シルト層、下半部が褐色シルトの小ブロックを上位に多く含み、下位に小亜角礫を含むにぶい黄褐色～褐色粘土質土で構成されている。当初、上半部の3層まで取り除いた面を底面と考えていたが、掘り足りないと考え下半部を掘りこんで完掘した遺構である。

遺物（図11、写真図版5、表2）

埋土下部から、6が出土している。皿形陶器で口唇が外反する口縁部片で、内外面に緑黄色の釉が施されている。長さ4cmの口辺部から口径を推定して反転実測を行った。釉、胎土等から瀬戸美濃産の陶器片で、16世紀に位置づけられる。

遺構の性格は不明である。出土遺物から、中世に属する遺構であると考えられる。

柱穴P1、P2

遺構（図8、写真図版3）

2個の南調査区の南端に位置し、P1は試掘時に確認、P2は表土を除去し、検出作業をしている時に確認されたものである。P1は上半部が削平されており、残存する形状は円形で、規模は径36cm、深さ約10cmである。底面は中央部が幾分くぼむ浅皿状を呈している。埋土は、炭化物粒、黄褐色砂質土の小ブロックを少量含むにぶい黄褐色砂質土でほぼ占められている。

P2はP1の西約2.4mに位置し、平面形がほぼ円形で、規模は径36cm×44cm、深さ31cmである。地面は西側半分が8cmほど深い。2個の柱穴の埋土から柱あたりは確認できなかった。また、2つの柱穴から遺物は出土していない。

2個の柱穴は、傾斜地の中腹に位置することから、柵の柱穴の可能性はあるが性格は不明である。時期についても、遺構の重複関係や出土遺物がなく、周辺からも遺物が出土していないことなどから、特定できず不明である。

北調査区

本調査区は幅約1mの屈曲する細長い調査区である。土層断面から少なくとも5条の溝跡を確認できた。これらは、古い溝跡の南側を切って新しい溝がつけられており重複している。南側の一番新しい溝跡から順にSD-1、SD-2、SD-3、SD-4、SD-5と名付けた。古い溝跡の埋土を切って新しい溝が構築され、更にその溝の埋土を切ってより新しい溝がつけられているため、精査時では1条毎に把握して精査していくことはできなかった。完全に把握できたのは、SD-1の北側の壁面とSD-4の南側の壁面である。計測値は、西壁側の埋土断面から読み取ったものである。

SD-1

遺構（図9、写真図版4）

本調査区の北側に位置し、SD-2を切ってつけられている。規模は幅約3.4m、深さ約1.1mである。断面形はV字形を呈し薬研堀型である。壁面は25°～30°位の傾きで立ち上がっている。埋土は上位灰黄褐色～黄褐色砂質シルト層、中位の上半がにぶい黄褐色～暗褐色シルト、下半が黒褐色シルト、下位が黒褐色シルトで構成されている。埋土は自然堆積の様相を呈している。特に、上位は水的作用による堆積がみられる。溝は東西方向に伸びている。

遺物（図11、写真図版5、表2）

27は埋土上位（30層）黄褐色砂層から出土した、ピンセット状に折れまがった鉄製のものである。用途は不明である。半製品の可能性もある。

SD-2

遺構（図9、写真図版4）

本溝は北側のSD-1の南側に位置している。SD-3の南側を切って、北側をSD-1に切られている。規模は残存する幅が約1.4mであるが、底面中央部から推定して約2.8m、深さが約0.8mである。断面形はU字形を呈している。壁面は傾き約30°で底面から立ち上がっている。底面の幅は約1mで、やや浅皿状を呈している。埋土は上位、中位が中間に黒褐色砂質土を挟むにぶい黄褐色シルト層、下位が灰黄褐色砂質シルト層で構成されて、中位、下位の土層に灰白色泥岩粒が少量含まれている。自然堆積の様相を呈している。

遺物（図10、写真図版5、表2）

14は播鉢の底部片で、埋土（40層）から出土している。胴部外面におろし目が隙間なく施され、底部外面に弧状のおろし目がつけられている。底部外面に回転糸切り痕がみられる。胴部外面はロクロナデで調整されている。色調はにぶい橙色である。在地系産で19世紀代のものである。

SD-3

遺構（図9、写真図版4）

本遺構はSD-2の南側に位置している。SD-4を切り、北面をSD-2に切られている。規模は幅が溝底部の midpoint から推定して約0.9m、深さが約0.6mである。断面形はV字形を呈しており薬研堀型である。壁面は傾き約40°で立ち上がっている。SD-1・2よりやや急な傾斜である。埋土は上位が灰黄褐色シルト層、中位がにぶい黄褐色シルト層、下位が黄褐色シルトや褐色シルトの小ブロックを含む暗褐色シルト層で構成されている。埋土は自然堆積の様相を呈している。東西方向に伸びているものと考えられる。出土遺物はない。

SD-4

遺構（図9、写真図版4）

本遺構は、調査区中央にあり、北側の一部をSD-2・3に切られている。埋土上半部は、SD-5に切られている。残存する部分から、幅は約5.8m以上、深さは約2.1mである。断面形は底面が平らな逆台形を呈していると推定される。残存する底面の長さは約2.7mである。壁面は傾き35°～40°底面から立ち上がっている。埋土は上位が炭化物を少量含む暗褐色砂質シルト層、中位がにぶい黄褐色シルトの小ブロックを含む暗褐色砂質シルト層、下位が黒褐色砂質シルト層で占められている。溝は東西方向に伸びている。

遺物（図10、写真図版5、表2）

15、16は、播鉢の胴部片で、埋土下部（68層）から出土している。内面に細かい目のおろし目が施され、おろし目とおろし目との間に1cm程の隙間を開けている。外面にはロクロ痕がみられる。17世紀末から18世紀に位置づけられると考えられる。

SD-5

遺構（図9、写真図版4）

調査区中央部に位置し、SD-4の埋土上部を切り込んでつくられている。幅は約5.4m、深さ約1mである。断面形は緩いU字形を呈しているが、底面の凹凸は大きい。長さ約2.4mの溝または土坑の可能性もあるが、大きい溝と考えて取り扱った。壁面は傾き約30°で立ち上がっている。

埋土の南半分はにぶい黄褐色砂質シルトや灰褐色シルト、径15～30cmの垂角礫を多く含む暗褐色～灰褐色シルトで人為的に埋められている。北側半分は上部が灰褐色～灰黄褐色砂質シルト層、下部が黄褐色シルトの小ブロックを含む砂質シルト層で占められている。

遺物（図10・11、写真図版5、表2）

10、19、20は、埋土（15・16層）から出土している。10は鉢の底部片で糸切り痕をもつ。外面に釉がみられる。胎土断面から、何度も焼成を受けていることがわかる。19、20は円形台の脚部または胴部片で、内面のロクロ痕が顕著である。2点とも、回転糸切り痕を持ち、窯焼成時にのせた陶器の一部が付着している。これら3点は窯道具であり、在地産で、19世紀代のものと考えられる。11は播鉢の口縁部片で埋土（6層）から出土したもので、内面の口縁部下端におろし目痕が見られる。9は播鉢胴部片で内面にやや粗いおろし目が施されたもので、埋土（9層）から出土している。9、11も在地系産である。出土遺物5点は19世紀に位置づけられるものである。

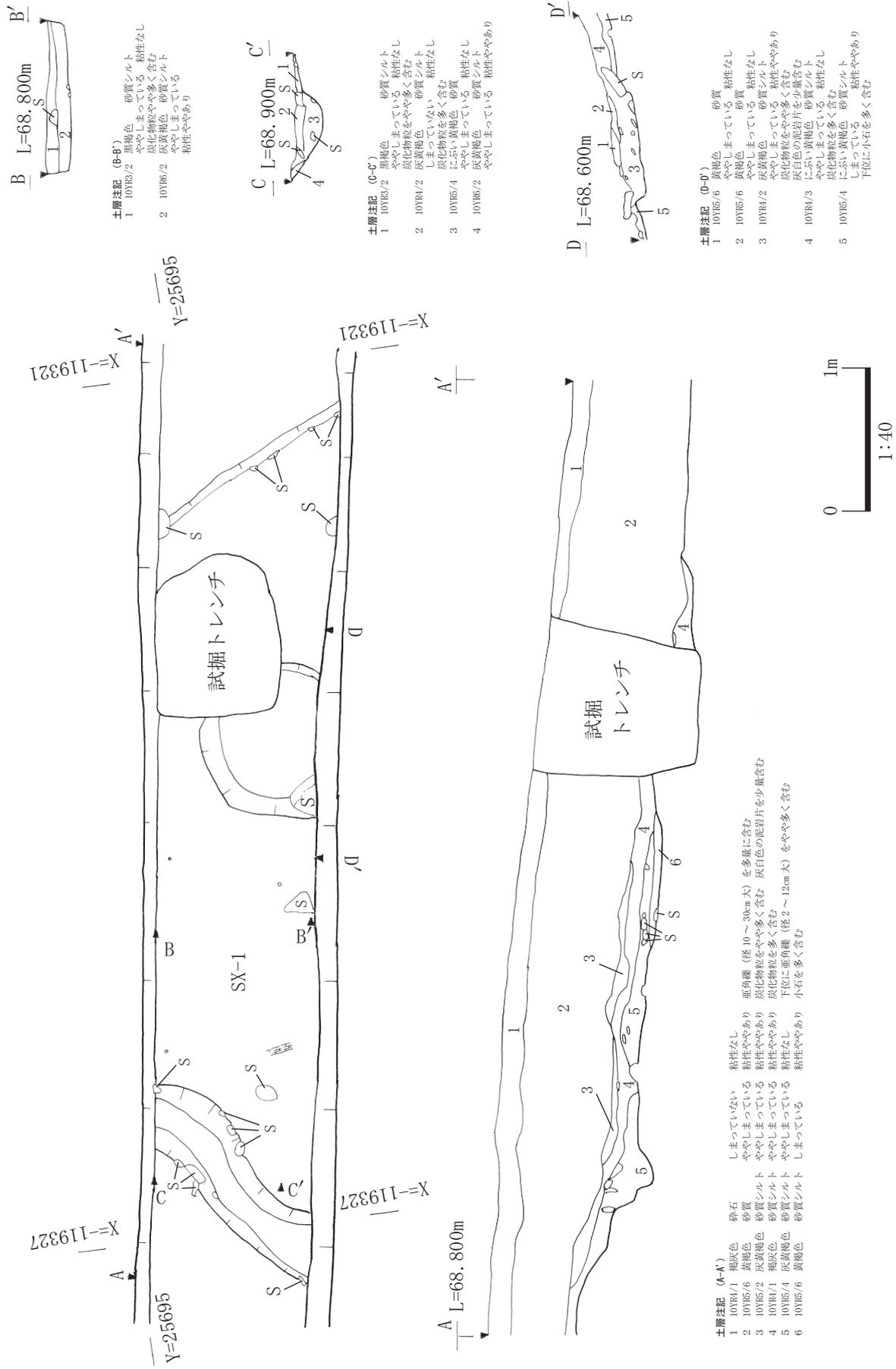


図7 SX-1 平面・断面図

遺構外出土遺物（図11・12、写真図版5、表2）

南調査区

7はロクロ調整している坏の口縁片である。須恵系土器で9世紀から10世紀のものである。21は碗の口縁部片で白磁である。中国（明）産で16世紀のものである。

北調査区

13は小形甕の口縁片で土師器と考えられるが、時期は不明である。12は陶器碗の口縁部片で、瀬戸産で19世紀のものである。18は陶器の鉢で3分の1程残存している。胴部は底部から内湾しながら立ち上がっている。底部外面に回転糸切り痕を持つ。胴部下端に直径1.2cmの孔を有している。内面中央に、焼成時に入っていた陶器の釉が付着している。サヤ鉢といわれる窯道具で、在地系産で19世紀のものである。

22は、挿鉢の口縁部片で、内面に粗いおろし目痕を持つものである。ロクロ調整され口唇部が外方につまみ出されている。17、23は、陶器挿鉢の胴部片で内面に粗いおろし目痕をもつ。17、22、23は在地系産で19世紀に位置づけられるものである。

25は試掘調査時に出土したもので、陶器の甕の胴部片である。焼成、整形、色調、胎土等から中世の陶器、常滑産の可能性もあるが、在地系産かもしれない。詳細は不明である。

（光井）

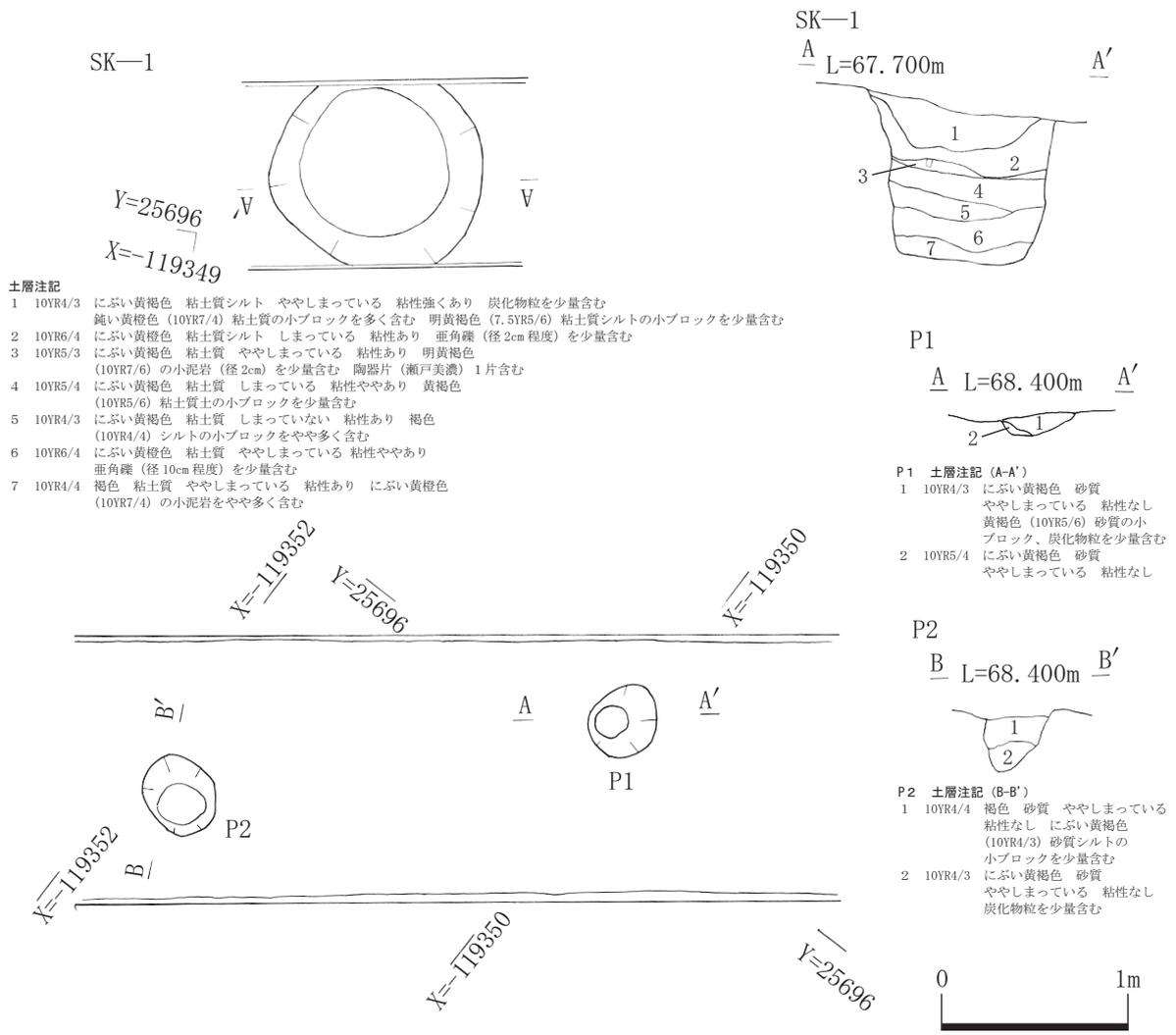
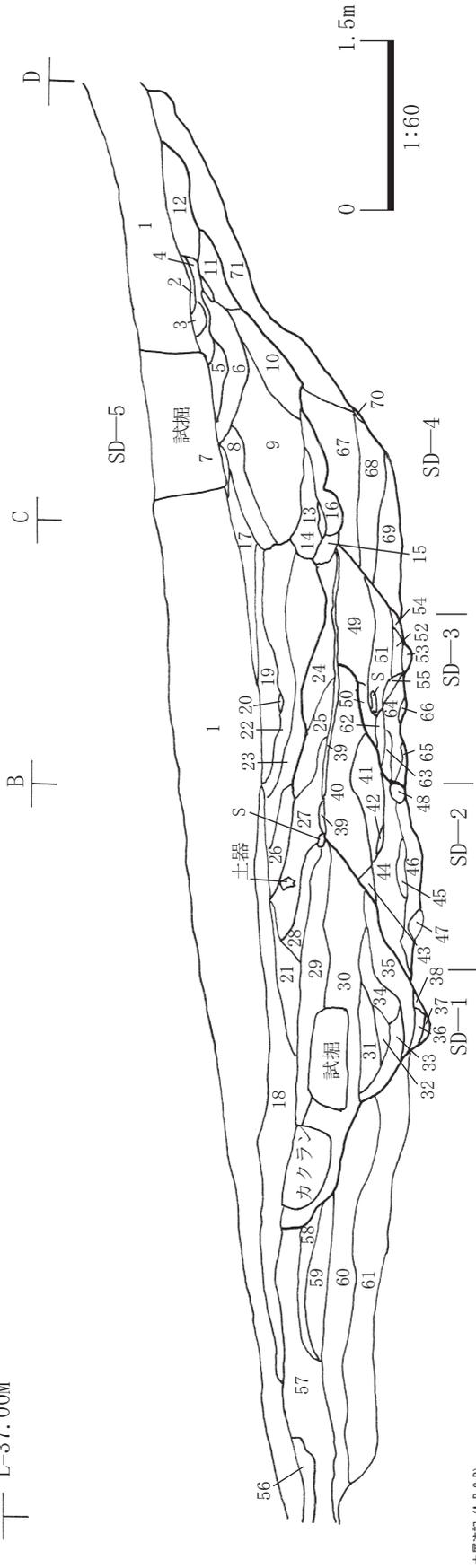


図8 SK-1 柱穴 平面・断面図

A L=37.00M



土層注記 (A-B-C-D)

| | | | | | | | | | |
|----|----------|--------|---------|-------------------------------------|----|---------|--------|--------|---------|
| 1 | 10YR4/1 | 褐色 | 粘性なし | 粘土 砕石 | 36 | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性あり |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色 | 粘性なし | 灰化物を含む 黄褐色泥岩を少量含む | 37 | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性なし |
| 3 | 10YR7/8 | 黄褐色 | 粘性なし | 岩石殻を多く含む | 38 | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性なし |
| 4 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性なし | 黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルトのブロックを多く含む | 39 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 5 | 10YR3/2 | 黒色 | 粘性なし | 灰黄褐色 (10YR6/2) の泥岩片 (径2~4cm) を多く含む | 40 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | シルト | 粘性あり |
| 6 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 粘性なし | | 41 | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性あり |
| 7 | 5YR4/2 | 灰褐色 | 粘性なし | | 42 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | シルト | 粘性なし |
| 8 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性ややあり | | 43 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 9 | 10YR4/3 | 暗褐色 | 粘性なし | にぶい黄褐色の泥岩を含む | 44 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 10 | 10YR3/2 | 暗褐色 | 粘性おすかあり | 灰化物を含む 灰化物泥岩を少量含む | 45 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色 | シルト | 粘性なし |
| 11 | 10YR2/1 | 黒色 | 粘性なし | 黄褐色 (10YR5/6) のシルトのブロックを少量含む | 46 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | シルト | 粘性なし |
| 12 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色 | 粘性なし | 黄褐色 (10YR5/6) のシルトのブロックを少量含む | 47 | 10YR3/2 | 暗褐色 | シルト | 粘性なし |
| 13 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色 | 粘性ややあり | 粘性ややあり | 48 | 10YR1/2 | 黒色 | シルト | 粘性なし |
| 14 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色 | 粘性ややあり | 粘性ややあり | 49 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 15 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性なし | 灰化物泥岩を少量含む | 50 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 16 | 10YR3/2 | 暗褐色 | 粘性なし | 灰化物泥岩を少量含む | 51 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 17 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 粘性あり | 粘性おすかあり | 52 | 10YR4/3 | 暗褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 18 | 10YR2/3 | 黒褐色 | 粘性ややあり | 黄褐色泥岩片 (径5~5cm) を多く含む | 53 | 10YR3/2 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性ややあり |
| 19 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性ややあり | 粘性ややあり | 54 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性なし |
| 20 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘性なし | にぶい黄褐色 (5YR5/4) の泥岩 (径3~12cm) を多く含む | 55 | 10YR1/2 | 黒色 | 粘土質シルト | 粘性なし |
| 21 | 10YR3/2 | 暗褐色 | 粘性なし | 灰化物泥岩を少量含む | 56 | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 粘性ややあり |
| 22 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性ややあり | 灰白色泥岩、黄褐色を多く含む | 57 | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 粘性ややあり |
| 23 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性ややあり | 黄褐色泥岩 (10YR5/6) 砂質シルトのブロックをやや多く含む | 58 | 10YR1/3 | 黒褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 24 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘性なし | 粘性ややあり | 59 | 10YR1/3 | 黒褐色 | シルト | 粘性あり |
| 25 | 10YR5/6 | 黄褐色 | 粘性ややあり | 粘性ややあり | 60 | 10YR1/7 | 黒色 | シルト | やや粘性あり |
| 26 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘性ややあり | 灰白色泥岩を少量含む | 61 | 10YR3/2 | 暗褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 27 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性なし | 灰白色泥岩を多く含む | 62 | 10YR5/6 | 黄褐色 | シルト | 粘性ややあり |
| 28 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性なし | 土器片 (中々鉢) を含む | 63 | 10YR1/2 | 黒色 | シルト | 粘性なし |
| 29 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性なし | 灰化物泥岩を少量含む | 64 | 10YR3/4 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性ややあり |
| 30 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 粘性なし | 黄褐色を多く含む | 65 | 10YR3/4 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性なし |
| 31 | 10YR3/2 | 暗褐色 | 粘性ややあり | 粘性ややあり | 66 | 10YR1/2 | 黒色 | シルト | 粘性なし |
| 32 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘性おすかあり | 黒褐色 (10YR2/2) 砂質のブロックを少量含む | 67 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性ややあり |
| 33 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘性あり | 灰白色泥岩、黄褐色を少量含む | 68 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性ややあり |
| 34 | 10YR2/2 | 黒褐色 | 粘性ややあり | 灰白色泥岩を少量含む | 69 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性なし |
| 35 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色 | 粘性なし | 灰白色泥岩をわすか含む | 70 | 10YR2/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性ややあり |
| | | | | | 71 | 10YR3/3 | 暗褐色 | 砂質シルト | 粘性おすかあり |

図9 SD-1・2・3・4・5 断面図

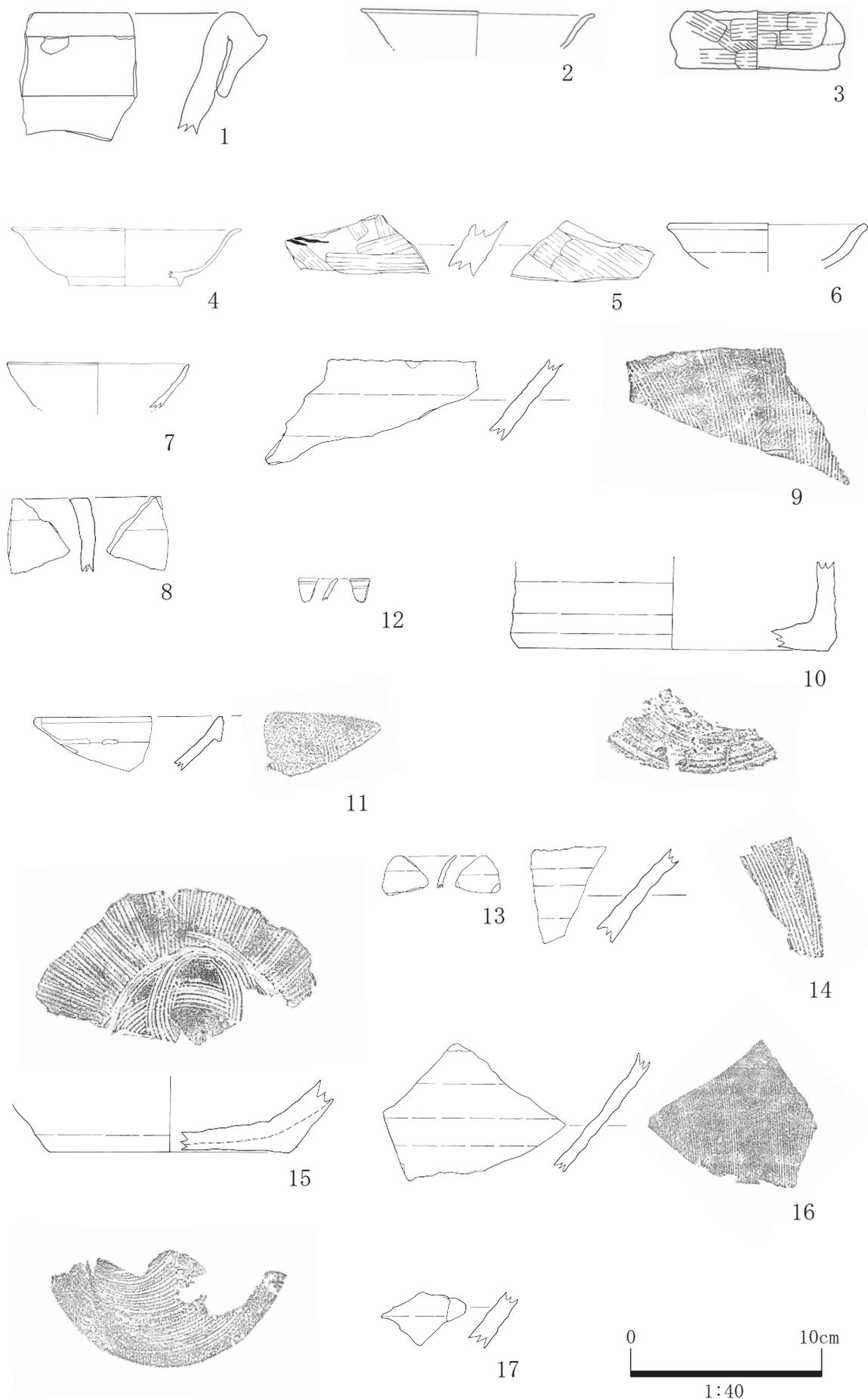
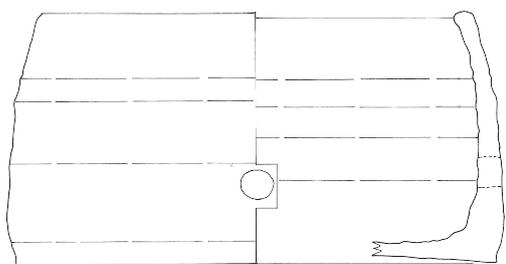
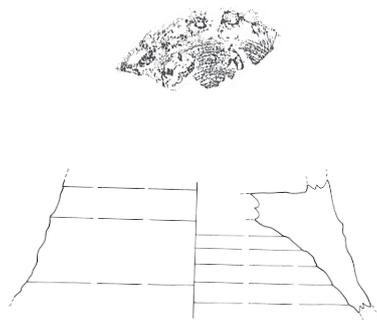


图10 出土遺物(1)



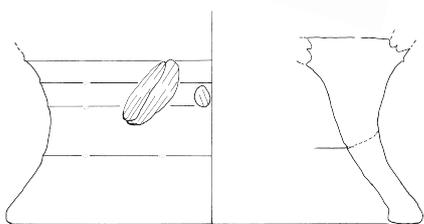
18



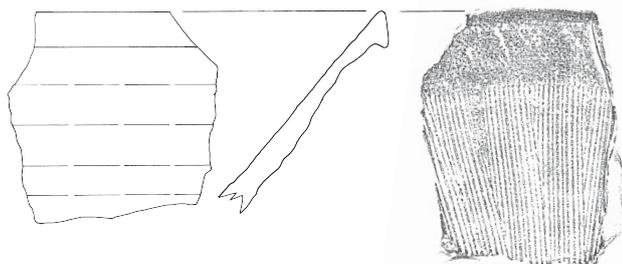
19



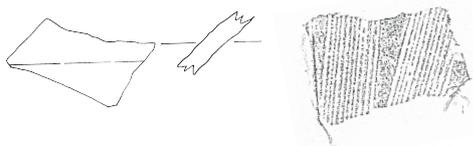
21



20



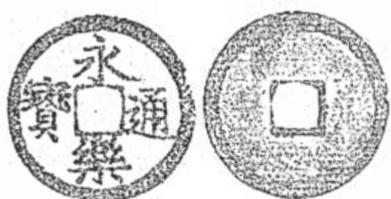
22



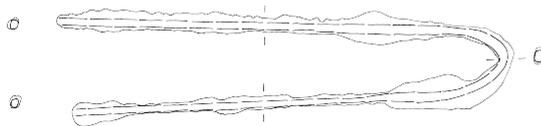
23



25



26



27



1:40



1:40

图11 出土遺物(2)

4 まとめ

今回の調査で検出された遺構は、南調査区で竪穴遺構1基、土坑1基、柱穴2個、北調査区で重複している溝5条である。

南調査区の遺構の時期は、竪穴遺構が15～16世紀、土坑が16世紀、柱穴が時期不明である。調査区は遊歩道、側溝をつくるため削平を受けているが、東斜面中腹のやや緩やかな面であったところと推定される。その地点に16世紀を中心とした遺物が出土することは、遅くとも一関城が16世紀に利用されていたことを裏付けるものと考えられる。

南調査区の溝5条の時期は17世紀末から19世紀で、約200年間に溝が使われなくなり埋没した後に新たに溝をつくっている繰り返しが行われている。途切れながらも19世紀まで一関城の北東斜面下部が溝として利用されていたことが判明した。5条の溝の新旧関係は、新しい順に(SD-1)→(SD-2)→(SD-3)→(SD-4)→(SD-5)である。江戸時代の一関藩の城下を描いた絵図をみると、一関城の北東斜面の裾野に沿って南東から北西方向に水路が描かれている。今回検出された溝も、更に溝の東西の調査が進めばその関連が解明されると思われる。

窯道具として使用されていたサヤ鉢や円形台が出土しており、周辺で陶器生産が行われていたと推定される。出土している在地系の播鉢片も有機的に関連しているかもしれない。

一関城遺跡の発掘調査は今回で4回目である。昭和59年度に北斜面を2ヶ所、昭和60年度に北斜面を1ヶ所、昭和61年に東斜面を8ヶ所の発掘調査が行われている。調査の成果と関連付けると、昭和60年度調査では小穴2基と直径約1mの円形土坑1基が検出され、小穴1基と土坑から16世紀に比定される陶器片が出土している。今回、南調査区で検出されたSK-1の土坑も円形で、16世紀の瀬戸美濃産の陶器片が出土しており、共通するものがある。一関城の16世紀の土坑を特徴づけるものであるかもしれない。昭和61年度調査された8ヶ所のうちの4ヶ所から防御施設と考えられる柱列が検出されているが、今回の調査における南調査区で検出した柱穴との関連があるのかは、今後の課題である。

今までの調査から、一関城は16世紀から北斜面、東斜面も利用されていたことが確定された。今回の調査では、奢侈品である16世紀の明の白磁片も3点出土しており、利用していた人たちを伺い知ることができる。18世紀代の遺物は今回の北調査区、北東斜面の下端部でしか出土しておらず、一関城の利用の変遷の一部が明らかになった。

(光井)

〔引用参考文献〕

鈴木省三編 1923「仙臺古城記（仙臺領古城書上）」『仙臺叢書』第四卷 仙臺叢書刊行會

宮城縣史編纂委員会編 1959「磐井郡西磐井郷 一關村 風土記御用書出」『宮城縣史』27 資料編5（風土記 西磐井郡 東磐井郡 気仙郡）財団法人宮城縣史刊行會

紫桃正隆 1972『史料 仙台領内古城・館』第一卷 岩手県南部（旧葛西領北部）宝文堂

一関市編纂委員会 1978『一関市史』第1巻通史

岩手県教育委員会 1986『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

飯村均・室野秀文編 2017『東北の各城を歩く 北東北編 青森・岩手・秋田』吉川弘文館

陶磁器観察表

| No. | 遺構・層位 | 種類 | 器種 | 部位 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 年代 | 備考 | 図版No | 写図No | 遺物番号 |
|-----|---------------|-----|------|------|--------|--------|--------|----------|-------------|------|----------|------|
| 1 | 南区 SX-1 底面直土 | 陶器 | 甕 | 口縁 | - | 6.4 | - | 15C前半 | 常滑産 | 図版10 | 写図5-1-1 | 1 |
| 2 | 南区 SX-1 埋土最下部 | 白磁 | 端反碗 | 口縁 | 12.2 | 1.9 | - | 16C | 中国(明)産 | 図版10 | 写図5-1-2 | 2 |
| 3 | 南区 SX-1 底面直土 | 土器 | 浅鉢 | 口縁～底 | (7.4) | 3.1 | (8.4) | 16C | 中世土器 | 図版10 | 写図5-1-3 | 3 |
| 4 | 南区 SX-1 底面直土 | 白磁 | 高台付皿 | 口縁～底 | (12.1) | 3.1 | 7.9 | 16C | 中国(明)産 | 図版10 | 写図5-1-4 | 4 |
| 5 | 南区 SX-1 底面直土 | 陶器 | 甕 | 胴 | - | 3.1 | - | 15C前半 | 常滑産 | 図版10 | 写図5-2-5 | 5 |
| 6 | 南区 SK-1 埋土下部 | 陶器 | 皿 | 口縁 | 10.4 | 2.4 | - | 16C | 瀬戸美濃産 | 図版10 | 写図5-2-6 | 6 |
| 7 | 南区 遺構外 | 須恵系 | 坏 | 口縁 | - | - | - | 9C～10C | | 図版10 | 写図5-2-7 | 7 |
| 8 | 北区 遺構外 | 陶器 | 甕 | 胴 | - | - | - | 19C | 在地系産 | 図版10 | 写図5-2-8 | 8 |
| 9 | 北区 SD-5 埋土 | 陶器 | 播鉢 | 胴 | - | (5.4) | - | 19C | 在地系産 | 図版10 | 写図5-2-9 | 9 |
| 10 | 北区 SD-5 埋土 | 陶器 | 窯道具 | 底～胴 | (16.8) | 4.7 | (16.2) | 19C | 在地系産 | 図版10 | 写図5-3-10 | 10 |
| 11 | 北区 SD-5 埋土 | 陶器 | 播鉢 | 口縁 | - | 2.9 | - | 19C | 在地系産 | 図版10 | 写図5-3-11 | 11 |
| 12 | 北区 遺構外 | 陶器 | 碗 | 口縁 | - | - | - | 19C | 瀬戸産 | 図版10 | 写図5-4-12 | 12 |
| 13 | 北区 遺構外 | 土師器 | 鉢? | 口縁 | - | - | - | - | | 図版10 | 写図5-4-13 | 13 |
| 14 | 北区 SD-2 埋土 | 陶器 | 播鉢 | 胴 | - | 4.9 | - | 19C | 在地系産 | 図版10 | 写図5-3-14 | 14 |
| 15 | 北区 SD-4 埋土 | 陶器 | 播鉢 | 底～胴 | - | - | 12.6 | 17C末～18C | (瀬戸系)産 | 図版10 | 写図5-3-15 | 15 |
| 16 | 北区 SD-4 埋土 | 陶器 | 播鉢 | 胴 | - | 6.4 | - | 17C末～18C | (瀬戸系)産 | 図版10 | 写図5-4-16 | 16 |
| 17 | 北区 遺構外 | 陶器 | 播鉢 | 胴 | - | 3.1 | - | 19C | 在地系産 | 図版10 | 写図5-4-17 | 17 |
| 18 | 北区 遺構外 | 陶器 | 窯道具 | 底～口 | (17.0) | 10.1 | (19.0) | 19C | サヤ鉢 在地系産 | 図版11 | 写図5-5-18 | 18 |
| 19 | 北区 SD-5 埋土 | 磁器 | 窯道具 | 底～胴 | - | 5.3 | - | 19C | 在地系産 回転糸切痕 | 図版11 | 写図5-6-19 | 19 |
| 20 | 北区 SD-5 埋土 | 陶器 | 窯道具 | 底～胴 | (16.6) | (7.4) | - | 19C | 在地系産 | 図版11 | 写図5-5-20 | 20 |
| 21 | 南区 遺構外 | 白磁 | 碗 | 口縁 | (11.8) | - | - | 16C | 中国(明)産 | 図版11 | 写図5-4-21 | 21 |
| 22 | 北区 遺構外 | 陶器 | 播鉢 | 口縁 | - | 8.2 | - | 19C | 在地系産 | 図版11 | 写図5-6-22 | 22 |
| 23 | 北区 遺構外 | 磁器 | 播鉢 | 胴 | - | 2.2 | - | 19C | 在地系産 | 図版11 | 写図5-6-23 | 23 |
| 24 | 北区 遺構外 | 白磁 | 皿 | 口縁 | - | - | - | 近世以降 | | 図版11 | 図なし | 24 |
| 25 | 北区 遺構外 | 陶器 | 甕 | 胴 | - | - | - | 中世 | 2019年試掘調査遺構 | 図版11 | 写図5-4-25 | 25 |

銭貨観察表

| No. | 出土地点 | 層位 | 種別 | 完 | 欠 | 直径(mm) | 孔径(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 材料 | 初鑄年 | 写真図版 |
|-----|-----------|----|------|---|---|--------|--------|--------|-------|----|-----------|------------------|
| 26 | SX-1 埋土下部 | 3層 | 永楽通寶 | ○ | | 25.0 | 6.0 | 1.0 | 3.0 | 銅 | 1411～1608 | 図版11-26 写図5-8 |

鉄製品観察表

| No. | 出土地点 | 層位 | 種別 | 完 | 欠 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 写真図版 |
|-----|---------|-------------|-----|---|---|--------|-------|--------|-------|------------------|
| 27 | SD-1 埋土 | 砂層 (30層) | 半製品 | ○ | | 18 | 5 | 5 | 53 | 図版11-27 写図5-7 |

表2 遺物観察表



1 南調査区 (E→)



2 北調査区 (NE→)

写真図版2



1 SX-1検出状況 (S→)



2 SX-1 平面 (S→)



3 SX-1 断面 (A-A'、E→)



4 SX-1 断面 (B-B'、S→)



5 SX-1 断面 (C-C'、S→)



6 SX-1 断面 (D-D'、W→)



7 SX-1 錢貨出土状況 (W→)



8 SX-1 白磁出土状況 (W→)



1 SK-1検出状況 (W→)



2 SK-1 平面 (W→)



3 SK-1 断面 (W→)



4 SK-1 陶器出土状況 (W→)



5 柱穴P1検出状況 (E→)



6 柱穴P1断面 (E→)



7 柱穴P2平面 (NE→)

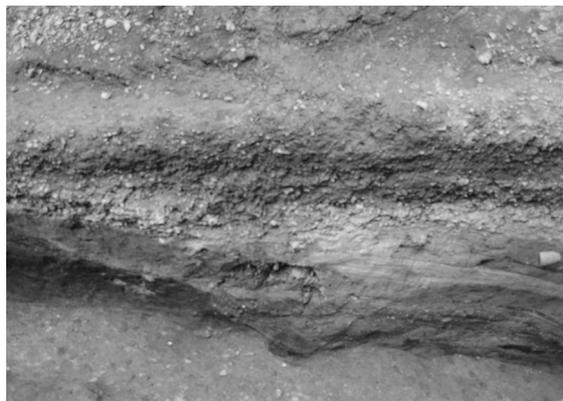


8 柱穴P2断面 (NE→)

写真図版 4



1 北調査区南側 (S→)



2 SD-1 断面 (W→)



3 SD-2・3断面 (EW→)



4 SD-3・4断面 (EW→)



5 SD-4 断面 (NE→)



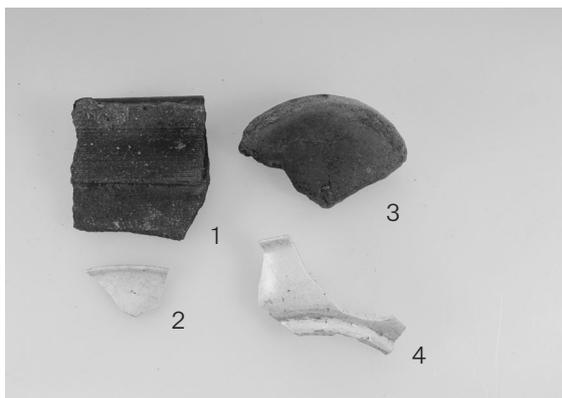
6 SD-3・4平面 (SW→)



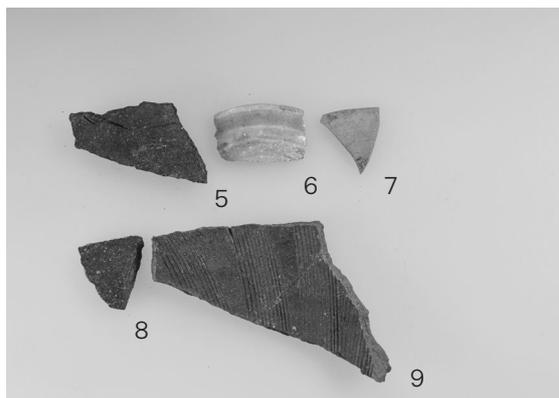
7 SD-1 サヤ鉢出土状況 (W→)



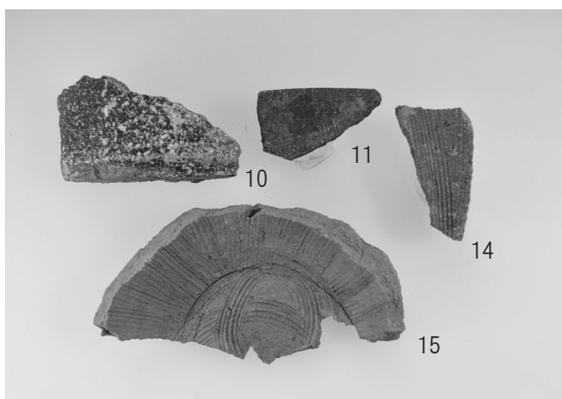
8 SD-1鉄製品出土状況 (E→)



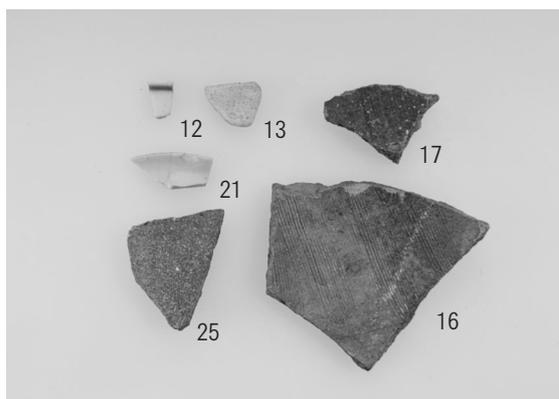
1 出土遺物 (1)



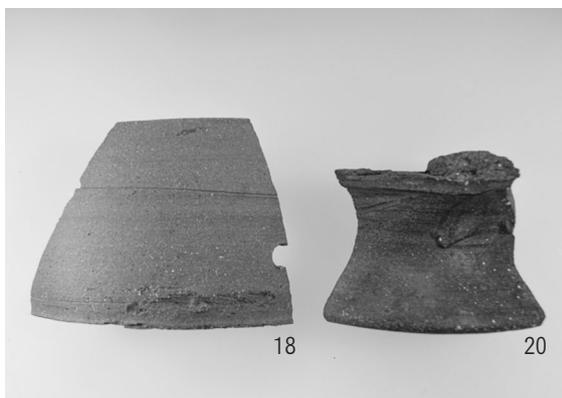
2 出土遺物 (2)



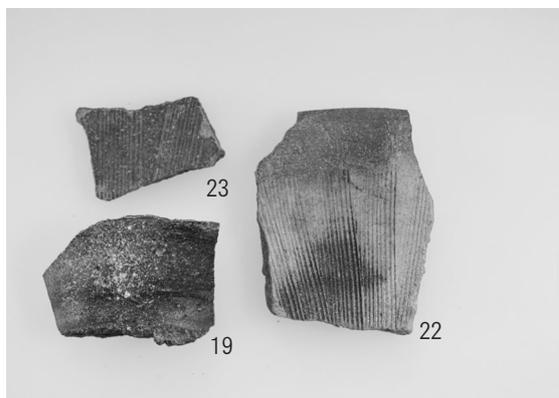
3 出土遺物 (3)



4 出土遺物 (4)



5 出土遺物 (5)



6 出土遺物 (6)



7 出土遺物 (7)



8 出土遺物 (8)

抄 録

| ふりがな | いちのせきじょういせきはつくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|-----------------|--|-------|-----------------------|--|--------------|---------------------------|------------------------|-----------|
| 書名 | 一関城遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 釣山地区配水管布設替工事に伴う発掘調査 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第30集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 菅原孝明・光井文行・阿部充 | | | | | | | |
| 編集機関 | 一関市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL0191-26-0820 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2021年3月22日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| いちのせきじょう 一関城 | いちのせき し あぎつりやま 一関市字釣山1-9 | 03209 | NE96- 2149 | 38° 55' 34" | 141° 07' 47" | 20200511 ～ 20200717 | 81m ² | 上水道 工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 一関城 | 城館跡 | 中世 | 竪穴遺構 柱穴 土坑 溝 | 土器 中国産白磁片 陶磁器 挿鉢 鉄製品 銭貨 | | | | |
| 要 約 | <p>今回の調査では、南調査区で竪穴遺構、土杭、柱穴、北調査区で溝を確認した。出土遺物から、遺構の時期は竪穴遺構が15～16世紀、土坑が16世紀と推定される。溝の時期変遷は17～19世紀と考えられ、一関城廃城後にも繰り返し溝がつくられたことを確認した。</p> <p>また、18世紀以降の遺物は北調査区でしか確認できず、戦国時代から江戸時代にかけての一関城の利用変遷が一部明らかとなった。</p> | | | | | | | |

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第30集

一関城遺跡発掘調査報告書

釣山地区配水管布設替工事に伴う発掘調査

| | |
|-------|--|
| 発行年月日 | 令和3年3月22日 |
| 発行 | 一関市上下水道部水道課 〒021-8501 岩手県一関市萩荘字脇田郷37 電話0191-26-4878 |
| 編集 | 一関市教育委員会文化財課 〒021-8503 岩手県一関市竹山町7-5 電話0191-26-0820 |
| 印刷 | 川嶋印刷株式会社 〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21 電話0191-46-4161(代) |